

# Publisher's Review

パブリッシャーズ・レビュー

● 東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙 ●



## みすず書房の本棚

【無料送付】

No. 26 2018 春

(表示価格は税別です)

113-0033 東京都文京区本郷 2-20-7 tel. 03-3814-0131 www.msz.co.jp

### 言葉とともに言葉を通して

矢野久美子

ハンナ・アーレントの『思索日記』にこんな叙述がある。根の喪失について語った箇所である。追放される者たちはたいてい断ち切られた根を置き去りにし、文字通り根無しになる。根を持ち出せる者たちもいるが、土がついていない根は支える力を失っている。とどまることができた者の根は、他の者がいなくなつたために剥き出しにされ、枯れ果てる。守られるべき暗闇、秘密を破壊されるからだ。解釈の余地はいろいろある。だが、他者を排斥しその足場を奪うという行為は、社会そのものを掘り崩し、自分の足場の喪失にもつながるといふことだ。一人で立っていらなくなつた人間はどうなるのだらう。集合的な運動体として群衆になるのだらうか。あるいは憎しみのエネルギーを住処とする存在になつてしまふのだらうか。

「怒りは、なにものにも守られることなく目立っている者に向けられる。自分たちの『基準』にあてはまらない、立場の弱い者への嫌悪、そうした者たちを攻撃してもかまわないという了解。この憎しみの奔流に飲み込まれないためには、どうしたらいいだらう。著者エムケは言う。憎しみは、何

七年生まれ。フランクフルト学派第二世代のユルゲン・ハーバーマスのもとで修士号を取得後、同大学のアクセル・ホネットとハーバード大学のセイラ・ベンハビブに学び、博士論文『集合的アイデンティティ——社会哲学的基礎づけ』を公刊。以後の著書には、記者として訪れた紛争地域での出会いとその地の人びとの経験を物語った『暴力の罅——戦場記者からの手紙』、『ドイツ赤軍についての思索』、『沈黙する暴力』(彼女

の代父で当時ドイツ銀行頭取であったアルフレート・ヘルハウゼンは一九八九年にベンツごと爆殺された)、同性愛を見つめたエッセイ『私たちの求め方』、理解や語りの敷居をめぐる『言葉にできるから——証人であることと正義について』などがある。著述活動以外にも、エムケは二〇〇四年からベルリンの劇場シャウビューネで毎月一回、さまざまなテーマでゲストを招いた討議を行つて

いる。二〇一六年ドイツ図書流通連盟平和賞の受賞式でエムケへの賞賛の辞を述べたのは、二十年以上前にハーバーマスのゼミで知り合った友人ベンハビブだった。二人を結ぶ共通点にはフランクフルト学派の流れをくむということに加え、アーレントの影響を受けているということがある。ちなみにアーレントは、一九五八年にエムケと同じ賞を受賞した

カール・ヤスパースへの賞賛の辞を任されたこともあった。ベンハビブはスピーチを「道徳的目撃者としての語り手」と題し、ベンヤミンの「物語作者」を援用しながら、沈黙と情報交換が支配的になり「経験の相場が下落した」世界のなかで「言葉の喪失」に抗うエムケの営みと力量を、高く評価している。エムケは若いころ戦争記者として人びとや自分の「経験」を伝達することの困難に直面し、言葉にすること自体に苦しんだという。『暴力の罅』が友人への手紙という形式をとっているのは、その苦悩があつたからである。ベンハビブは、「トラウマが言葉になりうるのは、誰かがその言葉になりうるものを他者と共有可能な物語へと作り上げるからです。これは知的な行為であるだけではなく、他者との道徳的ふれあいであると同時にひとつの芸術のかたちでもあります」と強調し、「物語は、それ以外の仕方ではたんなる出来事の耐え難い継起にすぎないものの意味をあらわにする」というアーレントの言葉を引用している。

本書では、普通のドイツ人が加害者となつたクラウスニッツのヘイト行動、警官の絞め技でエリック・ガーナーの命が失われたアメリカ合衆国スタテンアイランドの事件、性的マイノリティであるために世界各地で人びとが被る暴力などが叙述される。エムケの語りには、読む者をその場所・その時間へと引き込む力、思考へと促す力をもっている。憎しみという神話的暴力に抗つて、物語ること。個人の自由な身ぶりを保証しあうこと。「不純なものへの賛歌」を媒介として結びあうかたち。それは、「今日で終わりにしよう」というガーナーの抗い、こんな世界はもう嫌だという叫びを記憶することであり、インゲボルグ・バツハマンが「それを現実と呼ぼう」と語りかけたような「言葉とともに言葉を通してなにかにたどりつこうとする思索」でもある。「理性に訴えるだけの規範的な理論ではない」(エムケ)。

人種主義、ファナティズム、民主主義への敵意——ますます分極化する社会で、集団的な憎しみが高まっている。なぜ憎しみを公然と言つことが、普通のことになつたのだらう。こうした現象は、世界中でみられる。多くの難民を受け入れてきたドイツでも、それは例外ではない。二〇一六年、ドイツのクラウスニッツで、難民の乗ったバスを百人以上の群衆が取り囲んで罵声を浴びせ、立ち往生させる事件が起こつた。多くは近所のごく普通の住民だつたという。その様子はSNSで瞬く間に拡散し、おびえる難民の子どもや、手をこまめく警官の様子も映っている。それまでのドイツではありえなかつたこの事件は、社会に潜む亀裂をあらわにした。

「怒りは、なにものにも守られることなく目立っている者に向けられる。自分たちの『基準』にあてはまらない、立場の弱い者への嫌悪、そうした者たちを攻撃してもかまわないという了解。この憎しみの奔流に飲み込まれないためには、どうしたらいいだらう。著者エムケは言う。憎しみは、何



カロリン・エムケ © Andreas Labes

もないところからは生まれたい。なぜ憎むべきかという「理由」は、誰かがつくらないと存在しない。憎しみは、いまに始まつたことではなく、じつは長い歴史をもっている。いま大切なことは、憎しみの歴史に新たな一ページを加えることではなく、基準から外れたとしても幸せに触れて生きる可能性をつくつていくことではないだらうか。

著者カロリン・エムケはドイツのジャーナリスト。自分とは「違う」存在をつくりだし攻撃するとう、世界的に蔓延する感情にまっすぐに向き合った本書は、危機に揺れるドイツでベストセラーになった。いまの世界を読むための必読書。

「現代社会・暴力・ポピュリズム」(四六判・216頁・三六〇〇円)

フェリス学院大学教授

## ドイツでベストセラー

カロリン・エムケ

《憎しみに抗って 不純なものへの賛歌》

浅井晶子訳



「怒りは、なにものにも守られることなく目立っている者に向けられる。自分たちの『基準』にあてはまらない、立場の弱い者への嫌悪、そうした者たちを攻撃してもかまわないという了解。この憎しみの奔流に飲み込まれないためには、どうしたらいいだらう。著者エムケは言う。憎しみは、何

もないところからは生まれたい。なぜ憎むべきかという「理由」は、誰かがつくらないと存在しない。憎しみは、いまに始まつたことではなく、じつは長い歴史をもっている。いま大切なことは、憎しみの歴史に新たな一ページを加えることではなく、基準から外れたとしても幸せに触れて生きる可能性をつくつていくことではないだらうか。

著者カロリン・エムケはドイツのジャーナリスト。自分とは「違う」存在をつくりだし攻撃するとう、世界的に蔓延する感情にまっすぐに向き合った本書は、危機に揺れるドイツでベストセラーになった。いまの世界を読むための必読書。

「現代社会・暴力・ポピュリズム」(四六判・216頁・三六〇〇円)

フェリス学院大学教授

一九六五年九月七日、当時の佐藤政権は「沖縄の施政権は、平和条約により米軍が行使している」と公的に認めた(政府統一見解)。

米軍憲法が適用されるのである。それがどこか米軍の「軍事的必要性」が最優先され、戦時国際法も世界人権宣言も、国連憲章さえ遵守されない事態が日常化していた。

そもそも一九五五年から翌年にかけて、本土に駐留していた米海兵隊が沖縄に移駐したのは、反基地・反核・反米運動を抑圧したり、土地を強制収容することが、法的枠組みをいっさい無視して強行できるからであり、地政学的な理由は二次的な問題だった。

憲法と外交の専門家が協力し、これまで検証されな

### 「軍事植民地」が築かれた経緯

古関彰一／豊下楯彦

《沖縄 憲法なき戦後 講和条約三条と日本の安全保障》

膨大な国会議事録その他の資料を渉猟して、この無憲法状態のなかで、日米両国の思惑により「軍事植民地」が築かれた経緯を解明する。

東アジアの緊張が高まるいま、米軍は沖縄の陸、海、空を縦横に動きまわっている。私たちは「本土」の視点から、「基地の島」の歴史と現状をどう捉えなおすべきか。

終章では、米中のはざまを翻弄される東アジアの国々が沖縄を軸に、軍縮にむけた提携関係を構築するという新たな見取り図を示した。



沖繩 憲法なき戦後

### 19カ国語で刊行予定の衝撃作

S・ナイツェル／H・ヴェルツァー

ドイツ兵捕虜監獄記録に見る戦争の心理

第二次世界大戦中の連合国軍は、ドイツ兵捕虜の収容所に盗聴器を仕掛け、詳細な記録をとっていた。その総量は付随資料を含めると一五万頁に及ぶ。

従来歴史家は、取調べ調査、銃後の手紙、戦後書かれた回想録など、自己を正当化したり、読者を意識していたり、後付の知識で歪められていたりなど、問題含みの史料に依拠せざるをえなかった。しかし盗聴されていることを知らない捕虜同士の会話は赤裸々で、ドイツ国防軍のみならず軍隊一般の心性史について、全く新しい視座を拓

くものであった。この史料を発見した歴史学者ナイツェルはその画期性を看破し、社会心理学者ヴェルツァーに共同研究を持ちかけた。本書はこうして成った研究の成果である。普通の人々はいかにして兵士となり、殺

### 自身の鮮やかな記憶を出発点に

海老坂武《戦争文化と愛国心

非戦を考える》

「大東亜戦争」の始まりを国民学校一年生で迎え、「皇国の少国民」であることが最初のアイデンティティだった。戦争文化にどっぷり浸かって

いた自身の鮮やかな記憶に語らせながら、著者はそれを出発点に、戦争を誘発し、戦争への道を用意する戦争文化が何によって、誰によって形作られ、どのように生活に忍び



戦争文化と愛国心

### ローマ法学者が導く結論

木庭顕《憲法9条へのカタバシス》

憲法9条とりわけ2項をどう解釈すればいいのか。カタバシスとは、周辺へ下降するタイムトンネルをくぐって過去へ下りていくこと。そうして

1項はパリ不戦条約の不機能という古い歴史的経験に立つのであり、「一見不戦条約をそのまま継承するものに見えて、自衛のための戦争をも

有線を越えない実力形成といえども内部をトータルに軍事

### その思想を総体として捉えなおす

渡辺恭彦《廣松渉の思想

内在のダイナミズム》

一九六〇年代、学生運動の高まりとともに新左翼運動の理論家として一躍脚光を浴び、その後アカデミズムの中

「顧客から多くの秘密を打ち明けられます。自分のバンク

「顧客から多くの秘密を打ち明けられます。自分のバンク

「顧客から多くの秘密を打ち明けられます。自分のバンク



廣松渉の思想

「顧客から多くの秘密を打ち明けられます。自分のバンク

「顧客から多くの秘密を打ち明けられます。自分のバンク

### インスリン昏睡療法から磁気刺激まで

DE・ヒューター《電気ショックの時代

川島啓嗣他訳 ニューロモデュレーションの系譜》

一九世紀後半に至るまで、精神科治療は鎮静に限られていた。一九〇〇年以降に鎮静剤の進歩が起こったのちも、

そんな失意の時代にあつた精神科治療に光をもたらした「ショック療法」は、本

米国内で深く学びたい方へ

米国内で深く学びたい方へ

### 国境なき巨富の操縦術

ブルック・ハリントン

《ウェルス・マネジャー 富裕層の金庫番

世界トップ1%の資産防衛》

庭田よう子訳

「顧客から多くの秘密を打ち明けられます。自分のバンク

「顧客から多くの秘密を打ち明けられます。自分のバンク

「顧客から多くの秘密を打ち明けられます。自分のバンク

### みすず書房新刊

2017・11・2018・2

サルは大西洋を渡った

模範像なしに

例外時代

幕末的思考

グレイター・ベンヤミン

グレン・ゲールド発言集

知的改善論

三月十五日 カエサル

フクシマ2011-2017

夜と霧

日米地位協定

夜と霧

日米地位協定

夜と霧

日米地位協定

夜と霧

日米地位協定

夜と霧

日米地位協定

夜と霧

日米地位協定

夜と霧

日米地位協定

夜と霧

日米地位協定

夜と霧

日米地位協定

夜と霧

日米地位協定

夜と霧

日米地位協定

夜と霧

日米地位協定

夜と霧

日米地位協定

夜と霧

日米地位協定

夜と霧

日米地位協定

夜と霧

日米地位協定

夜と霧

日米地位協定

夜と霧

日米地位協定

夜と霧

日米地位協定

夜と霧

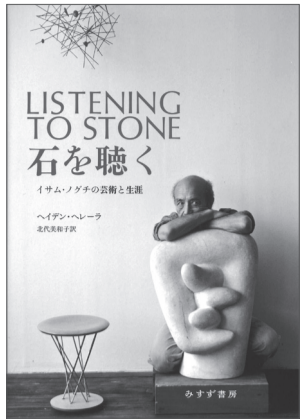
# 空間の彫刻家、評伝の決定版

ヘイデン・ヘレラ  
北代美和子訳

《自然石と向き合っている》と、石が話を始めるのですよ。その声が聞こえたら、ちよっとだけ手助けしてあげるんです。

《石を叩くとき、ぼくはあがままのわれわれのこだまを聞く。それから宇宙全体が反響する。(…)もし石が、ぼくが手を触れる前のほうがよいのだとしたら、そこになにかぼくのなすべきことがあるだろうか?》

時に挑み、時に触れる——アメリカ人の母と日本人の父



「子ども時代以来ほとんど忘れた自然の泥のなかで疲れさせるためには、人は陶芸家あるいは彫刻家でないならばならない。」ユネスコ庭園、ヒリール・ローズ彫刻庭園、《赤い立方体》、広島平和大橋、《あかり》シリーズなどの自作解説から「サム・ノグチ」展 香川県立ミュージアムで6月3日(日)まで開催中(のち東京へ巡回)

植民地時代に誕生し、南北分断、朝鮮戦争を経て今日まで制作されてきた「コリアン・シネマ」。その制作・受容は、いまや一国内に留まらず、多様な地域性をもつ人々を巻き込みながらトランスナショナルな発展を遂げている。

## 石を彫る手で紡がれた思索

北代美和子訳 《イサム・ノグチ エッセイ》

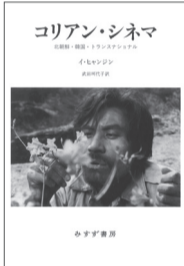
「子ども時代以来ほとんど忘れた自然の泥のなかで疲れさせるためには、人は陶芸家あるいは彫刻家でないならばならない。」ユネスコ庭園、ヒリール・ローズ彫刻庭園、《赤い立方体》、広島平和大橋、《あかり》シリーズなどの自作解説から「サム・ノグチ」展 香川県立ミュージアムで6月3日(日)まで開催中(のち東京へ巡回)

「子ども時代以来ほとんど忘れた自然の泥のなかで疲れさせるためには、人は陶芸家あるいは彫刻家でないならばならない。」ユネスコ庭園、ヒリール・ローズ彫刻庭園、《赤い立方体》、広島平和大橋、《あかり》シリーズなどの自作解説から「サム・ノグチ」展 香川県立ミュージアムで6月3日(日)まで開催中(のち東京へ巡回)

## 文化的底流を読み解く

栗原詩子訳

清教徒が建国した合衆国で、市民は映画を観るために聖書に出会う。映画のかたちをとった聖書物語もあれば、映画の中の聖書モチーフもある。映画は聖書を使いながら、時代の関心や恐れ、希望を表現してきた。



「十戒」「ベン・ハー」など旧約聖書叙事詩映画は、米国を古代イスラエルに結びつけ、圧政からの解放者という国家観を暗示した。キリスト的人物像は、西部劇やラブ・コメディ、スーパーマン映画に欠かさない。「ブレードランナー」「アバター」などSF映画で描かれる終末世界の源泉には聖書がある。聖書学者が聖書と映画学を統合し、200作品からアメリカ文化の底流を読み解く。「映画・文化論」みかこ/國分功一郎ほか(一、四六判・480頁・四八〇〇円)

## 民族的アイデンティティを探る

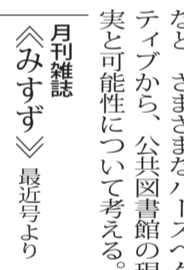
武田珂代子訳 北朝鮮・韓国・トランスナショナル

本書では、これらの映画がコリアンの文化的テクストとして果たしてきた役割を考察する。第一部では「春香伝」の翻案映画や『血の海』『南部軍』等の代表作をジェンダー、イデオロギ、階級の観点から分析。政治的には反目しつつも民族的同質性を重んじるコリアンの姿を浮き彫りにする。第二部では、社会批評や歴史の継承の観点から『オールド・ボーイ』『ナムムの家』等の作品群を論じ、さらにコリアン・シネマの最新事情も紹介する。「映画・ジェンダー」(四六判・456頁・六〇〇〇円)

## 何をしてきたか・何ができるのか

柳与志夫 編 公共図書館の冒険

いまも多様性と画一性の間で模索をつづけている公共図書館。明治以降今日まで数々のアプローチがなされながら定着しなかった試みはどのようだったのか——図書館で働く人々/貸出カウンターの内と外/未来につながるヒストリー 関係者必読の書

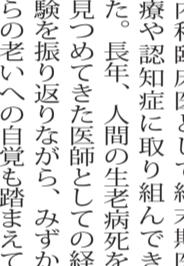


「公共図書館の冒険」関係者必読の書。公共図書館の歴史、デジタル公共図書館の夢と挫折、「中小レポート」と「市民の図書館」の問題提起など、さまざまなパースペクティブから、公共図書館の現実と可能性について考える。「月刊雑誌」みすず/最近号より

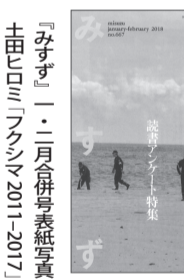
## 超高齢化社会の人生賛歌

大井玄 《老年という海をゆく》

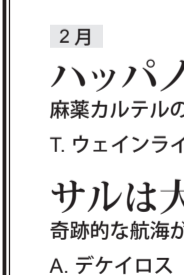
著者は一九三五年生まれ。公衆衛生学者として水俣病やエイズの研究に携わり、また内科臨床医として終末期医療や認知症に取り組んできた。長年、人間の生老病死を見つめてきた医師としての経験を振り返りながら、みすずの老いへの自覚も踏まえて



「超高齢化社会の人生賛歌」著者は一九三五年生まれ。公衆衛生学者として水俣病やエイズの研究に携わり、また内科臨床医として終末期医療や認知症に取り組んできた。長年、人間の生老病死を見つめてきた医師としての経験を振り返りながら、みすずの老いへの自覚も踏まえて



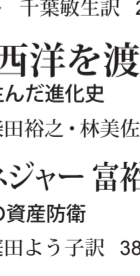
「ハッパノミクス」麻薬カルテルの経済学。T. ウェインライト 千葉敏生訳 2800円



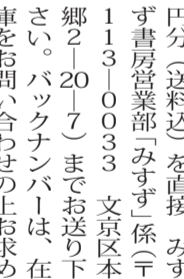
「日本の長い戦後」敗戦の記憶・トラウマはどう語り継がれているか。橋本明子 山岡由美訳 3600円



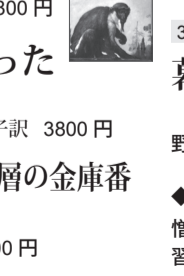
「幕末的思考」野口良平 3600円



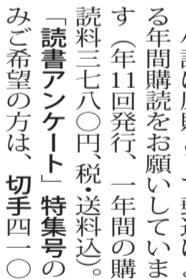
「時間かせぎの資本主義」いつまで危機を先送りできるか。W. シュトレック 鈴木直訳 4200円



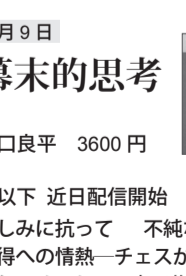
「ジェネリック」それは新薬と同じなのか。J. A. グリーン 野中香方子訳 4600円



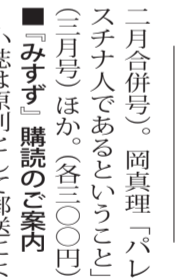
「天の宮の逝く国で」増補版。大島かおり訳 3600円



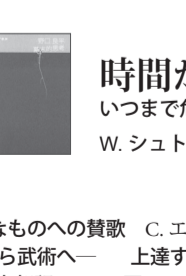
「沖縄基地問題の歴史」非武の島、戦の島。明田川融 4000円



「夕風の島」八重山歴史文化誌。大田静男 3600円



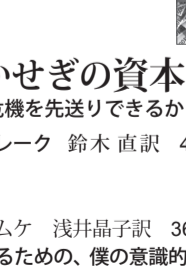
「外地巡礼」越境の「日本語文学論」。西成彦 4200円



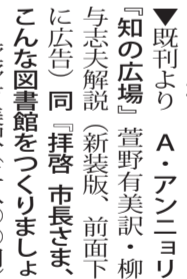
「天皇の逝く国で」増補版。大島かおり訳 3600円



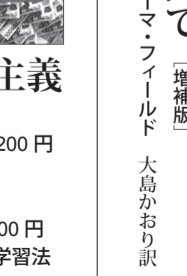
「日米地位協定」その歴史と現在。明田川融 3600円



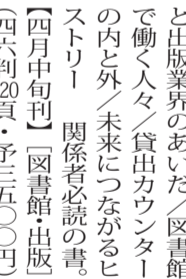
「沖縄を知る、沖縄を考える」明田川融 3600円



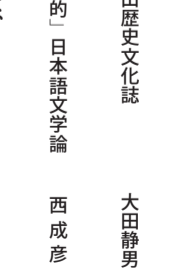
「幕末的思考」野口良平 3600円



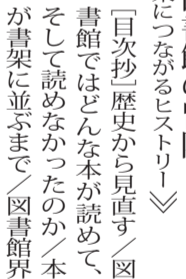
「時間かせぎの資本主義」いつまで危機を先送りできるか。W. シュトレック 鈴木直訳 4200円



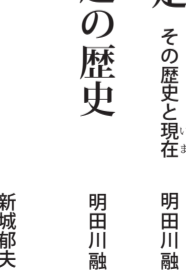
「ジェネリック」それは新薬と同じなのか。J. A. グリーン 野中香方子訳 4600円



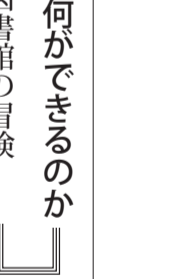
「天の宮の逝く国で」増補版。大島かおり訳 3600円



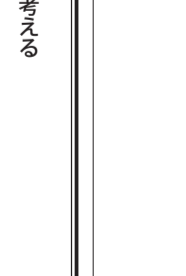
「沖縄基地問題の歴史」非武の島、戦の島。明田川融 4000円



「夕風の島」八重山歴史文化誌。大田静男 3600円



「外地巡礼」越境の「日本語文学論」。西成彦 4200円



「天皇の逝く国で」増補版。大島かおり訳 3600円

二〇一四年七月、写真家・西澤丞は、福島第一原子力発電所での記録撮影を開始した。それ以来現在まで、福島第一の廃炉作業を撮影し続けている。

原子炉の周囲で働く人々や、汚染水処理設備の内部、ガレキの積み重なる放射性廃棄物の保管庫。防護服を着て、作業員と同じ目線で撮影された写真の数々からは、ただ見ているだけでも、まるでその場に立っているかのような緊張感が伝わってくる。そして、今もそこで働いている人がいるという事実が改めて気づかされる。

「この撮影に関して、私は、何かしらの意見を伝えることを目的にしているのではない。ただ、現場に行くことができない人に対して判断材料を提供したいと考えてい

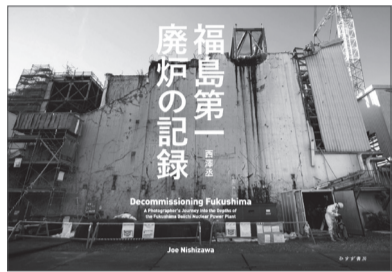
### 継続的に撮影された唯一の写真集

西澤丞

#### 《福島第一 廃炉の記録》

Joe Nishizawa, Decommissioning Fukushima:

A Photographer's Journey into the Depths of the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant



る。」(序文より抜粋) 写真集『福島第一 廃炉の記録』には、廃炉作業の進捗によりめまぐるしく変わっていく福島第一と、津波の爪痕など、事故当時の痕跡を残す福島第一、その両方が捉えられている。

約一五〇点のカラー写真に解説文と図版を添えた。日英併記。「写真集・福島・原発」(A4横・120頁・三三〇〇円)

「刊行前から、著者にメディアの高い注目。2月1日、NHK福島のニュース番組「ほまなかあいつ」内で紹介。2月14日、毎日新聞に著者紹介記事。2月17日、朝日新聞社主催「築地本マルシェ」内で著者トークショー開催。2月27日、福島民報に著者紹介記事。また「ユートン」4月号(2月26日発売)には、著者の写真を多数用いた14頁にわたる記事が掲載されました。3月、2日の北海道新聞夕刊をはじめさらに多くのメディア紹介が予定されています。

#### 装い新たに、美術ファンへ

W・ケルステン編 高橋文子訳

#### 《クレイの日記》

「私は主張する。私は知っている。私は信じていない。私は信じている。私は信用しない。私はお願ひする! 私ほうらやまない。私は振り返らない。私は行動する。私は反抗する。私は嫌悪する。私は嫌悪しながら創作する。そうしなければならぬ。」(第一の日記)

「文化の歴史においては、様々な個性やそれらをつなげる思想的傾向によって、象徴的な価値を獲得し、神話の次元にすら達し得る出会いがある。ケージとブルーレスの二人は、第二次世界大戦後の音楽史の徹底して対照的な二つの傾向を今日体現している。当時の彼らの交流の強さは、時が経つてみると、重要かつ驚異的な次元を獲得する(J・J・ナティエ)。(四月中旬刊)『音楽・現代思想』(A5判344頁・予六〇〇〇円)



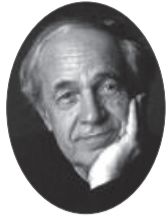
《カイルアの門の前面にて》1914年

「喪の作業としてのPTSD」他 全30編 中井久夫集6 《いじめの政治学》(第6回配本) 1996-1998

二〇一七年特別展 土田ヒロミ写真展 『2017-2017フクシマ』 トークイベントも開催 東京の銀座ニコンサロンで20日(火)まで開催中、大阪ニコンサロンで4月5日(木)18時半(最終日15時まで)、日曜休。土田ヒロミ×川延安直(福島県立博物館専門学芸員)はま、なかあいつ文化連携プロジェクト事務局)トークイベント 3月9日(金)19時-土田ヒロミギヤラリ! トーク 3月17日(土)14時-土田ヒロミ×上田俊英(朝日新聞編集委員)トークイベント 4月6日(金)19時- 最新写真集『フクシマ2017-2017』は、本紙二面に広告

#### みすず書房 営業部だより

朝日新聞社主催のイベント「築地本マルシェ」が無事に終了しました。「本」をキーワードに講演会、トークショーが開催され、多くの読者の方々にご来場いただきました。弊社も出展して、謝恩価格で書籍の販売を行い、昨年今年と、二年連続で中止となつた東京国際ブックフェアを残念に思われていた方々に喜んでいただくことができました。また会場内で開いた『福



ブルーレス

現代音楽・芸術を代表した二人の巨匠。かたやアメリカの音楽家・作曲家・詩人ジョン・ケージ(一九二九-一九九二)、かたやフランスの作曲家・指揮者ピエール・ブルーレス(一九二五-二〇一六)。著書も



ケージ

#### 現代音楽 二人の巨匠の交友と決裂

ナティエ/ブルーレス/ケージ 往復書簡 1949-1982 笠羽映子訳

多いブルーレスとケージの一九四九年から八二年まで、五〇通の往復書簡と論考を通して、現代音楽最前線や二人の交友、そして決裂にいたるまでの様子を生き生きと描く。関係者待望の読み物資料。(A5判344頁・予六〇〇〇円)

### 新装版

4月

#### 臨床日記

フェレンツイ フロイトの一番弟子による、精神分析史上、最重要なドキュメント。森茂起訳 ¥6600

#### 一次愛と精神分析技法

バリント フェレンツイの弟子が、愛と性を主題として分析を加えた全20章。森・耕夫・中井訳 ¥7400

#### PTSDの医療人類学

ヤング <トラウマ>が抱えるあらゆる問題に立ち向かった、熱意と批判の書。中井久夫他訳 ¥7600

#### 精神疾患は脳の病気か?

向精神薬の科学と虚構

ヴァレンスタイン 精神薬理学はどこまで科学的論証に耐えるだろうか? 功刀監訳 中塚訳 ¥5400

#### みすず書房 近刊のお知らせ

5-6月の刊行予定から

- 死を生きた人びと——往診医のノートから (仮) 小堀嶋一郎
  - 「蓋然性」の探求 (仮) 全2巻 フランクリン 南條郁子訳
  - ビットコインはチグリス川を流れる (仮) パーチ 松本 裕訳
  - 免疫の科学論 クリルスキ 矢倉英隆訳
  - マクヒュー/スラヴニー 現代精神医学 澤 明監訳
  - ロラン・バルトによるロラン・バルト 石川美子訳
  - Haruki Murakamiを読んでいるときに我々が読んでいる者たち 幸島デイヴィッド
  - 異議申し立てとしての宗教 ヴィシワナータン 田辺明生・三原芳明訳
  - 予測不可能性 あるいは計算の魔 エクランド 南條郁子訳
- (www.mszo.co.jp/book/new/ にもご案内)

#### みすず書房・最近の重版より

- 日米地位協定 その歴史と現在 ¥3600 明田川融
- 日本の長い戦後 ¥3600 橋本明子 山岡由美訳
- 日本の200年 徳川時代から現代まで 上 [新版] ¥3600 A.ゴードン 森谷文昭訳
- 子どもたちの階級闘争 ¥2400 プレイディみかこ
- イングリッシュネス 英国人のふるまいのルール ¥3200 K.フォックス 北條文緒・香川由紀子訳
- スピノザの方法 ¥5400 國分功一郎
- 夢遊病者たち 2 ¥5200 C.クラーク 小原 淳訳
- 心的外傷と回復 [増補版] ¥6800 J.L.ハーマン 中井久夫訳
- 芸術人類学 ¥2800 中沢新一
- ルドン 私自身に ¥4200 池辺一郎訳